

『若い力』一九六六年九月（海外協力事業団）

終戦記念日に思ったこと



矢口 新

八月十五日は終戦記念日だった。あちらこちらでいろいろな催しも持たれて、あらためて二十一年前のこと、戦時中のことなど思い起させていた。私も朝からそれに関するテレビの座談会を二つばかり見た。戦中派、戦後派の人々が思い出やら感想を語った中で、気になったことがあった。

みんなが平和はいいものだ。自由を感じると異口同音に述懐していたが、同時にその口うらに、しかしこれでいいのかという一抹の不安をもらした。時々ふつと気の抜けたような空虚さが顔を出した。そして私もはっと思い当るものがあるのである。実は私もこの頃折にふれて、それを感じる。今の平和の空虚さといったら、少し大げさかも知れないが、人々の心に満たされない何ものかがあるのではなからうか。それは何なのであろうか。

今のわれわれは平和で自由であるけれども、

ベトナムに戦争がある。それをめぐっていつ世界の平和が破れるかも知れないという不安であるうか、それもあるにはある。しかし、もつと心の奥底にチラツと姿をあらわすもの、われわれ自身の側にあるものである。人間が非常に幸福の時、何かしら感じる不安に似ている。

テレビの座談会でも戦中派の人が言っていた。戦争は实际いやだった。私たちの青春は全く灰色の青春だった。しかしそれにもかかわらず、いかに毎日を充実して生きるか、いのちの尊さを今日今ここで実現するかということに全力をつくした。この経験は尊いもののように今でも思われると。この言葉は、私にさまざまな感激を与えてくれた。

今の人間が毎日を充実して生きていないとはいえないと思う。命の尊さを感じていないとはいえないであろう。けれども、自由と平和な今、とかく甘ったれてはいないか。あぐらをか

いていることもありはしないか。とかく泰平に慣れることがありはしないか。

戦争はわれわれを追いつめたけれども、われわれは追いつめられて生命の燃焼をなしとげた。みんな協力して戦に加って、早く平和を、あるいは正しい社会を実現したいと思っていたのだ。（一般の人々は心からそう思っていたのだ）これは戦争自体が誤っていたこととは関係がないのである。

今はその平和が与えられたかの如くみえる。いな与えられているといってもよいであろう。それを人々は享受している。そのご馳走をたらふく食べている状態である。それでよいのだろうか。

なる程自由で平和だ。しかしこれがつづれるのではないか。これを守り育てるのには、ただこの自由と平和を満喫しているだけでよいのだろうか。つまりより正しい平和と自由への戦いが無いのではないか。

平和への戦とは決してベトナム戦争反対のデモをすることだけではあるまい。むしろそれも泰平になれた人々の空虚な叫びに終つていられないか。

私はこの頃の世相が戦争時代の世相とよく似ているのではないかという気がする。外面的な点、物の豊かさとか、生活の仕方とかという

点ではない。もっと根底にある何物かである。何をみても、まっとうではない。これで戦争に勝てるかという感じを戦争中には常に思っていた。竹やり戦争で科学的武器に勝てる、それは精神力だといったその非合理的な考え方である。何かというと非国民として人々の心を抑えつけたあの横暴さである。表むき愛国などという人が、陰でひどいことをして私利をむさぼり、私欲をこやしていたあのいやらしい世の中である。そこには本当に正義や人間性が影をひそめていたのである。これで戦争に勝てたら奇跡だと思っていた。

この頃私はまたそう感じる。政治をはじめとして各界の指導者級の人々の腐敗と墮落ぶり。あらゆる階層の人々の自由に慣れた放縦。誰もが国や社会よりまず自分を考えるという生活。これは戦争中とちよūd反対の環境で生み出されているが、やはり同じく非人間的な姿ではないか。これで平和や自由が維持できるとしたらやはり奇跡ではないのか。

若い力とは、ただ年令の若さではあるまい。正義や人間性をあくまでつらぬく若さであるう。私は本当の若さに期待する。

(日本生産性本部参与)